

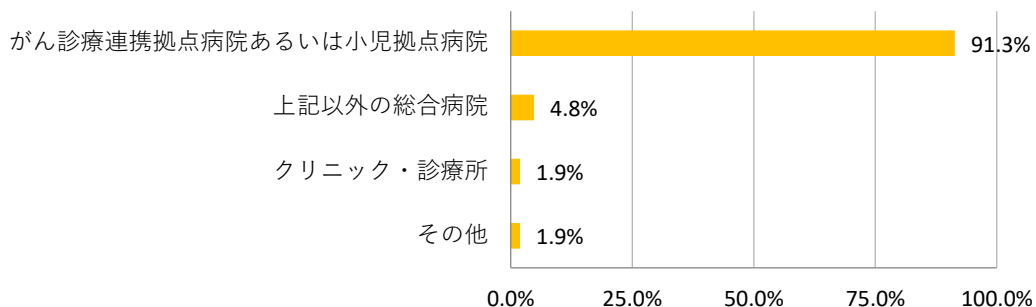
医療現場におけるがん患者・パートナーへの セクシュアリティ支援 アンケート結果報告

がんの進行や治療は、治療後の性生活・妊娠・出産といった性機能や生殖機能に影響を与えることがあります。多くのがん経験者ががん治療後に性の悩みや気がかりを感じていること、それらの悩みの多くが支援につながっていないことが明らかになりました。一方、がん医療に携わる医療職の多くは性(セクシュアリティ)の教育を専門的に受けているわけではないため、相談があってもどのように支援してよいかわからず困っていることがあるかもしれません。日頃、がん患者・パートナーから直接相談を受けたり、支援をしたりしている医療職のみなさまを対象に、がんと性(セクシュアリティ)に関する支援についてのアンケートに協力をお願いし、これまでに回答が得られた結果をまとめました。

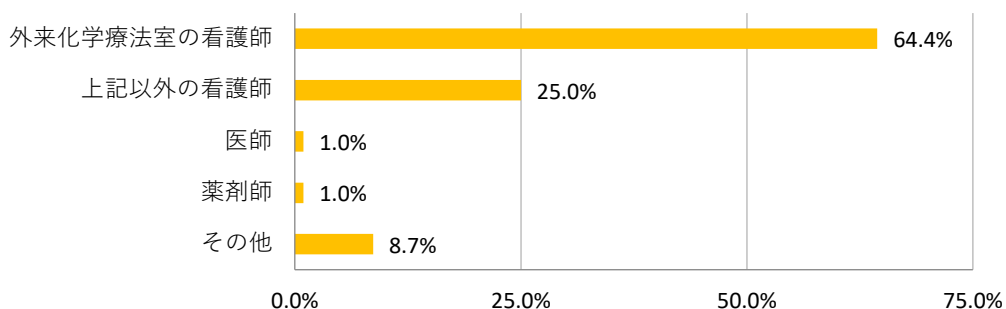
実施期間	2022/2/1～2022/9/20
アンケート依頼数	457施設 + WEB
アンケート依頼先	小児を含むがん診療連携拠点病院 外来化学療法室、WEB
アンケート回答数	104施設
アンケート調査方法	郵送による送付・回収およびWEB回答

※認定NPO法人キャンサーネットジャパンでは、がんになっても安心して性について語り合える社会の実現を目指して、2019年より2022年年度末にかけて日本対がん協会の協力による休眠預金活用事業として、がん患者・パートナーへのセクシュアリティ支援事業を実施しています。

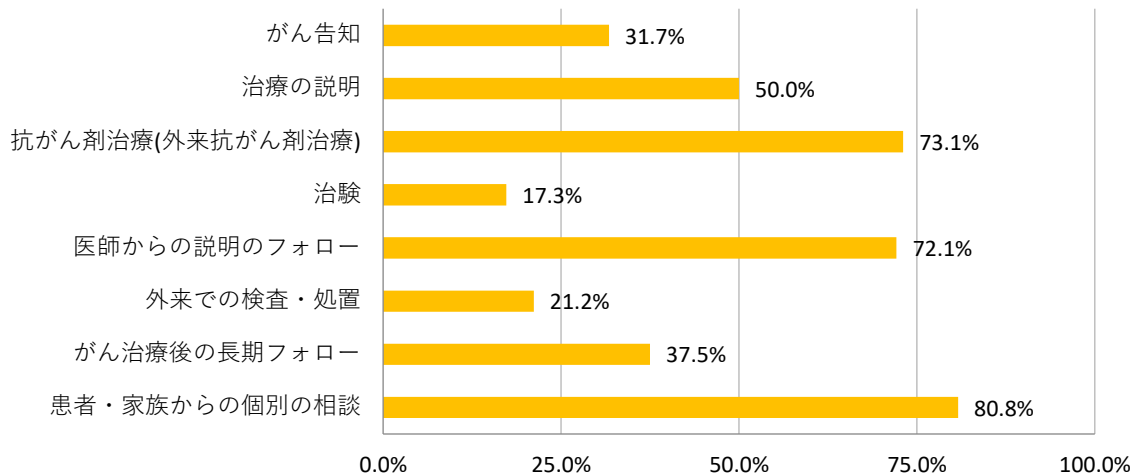
問1 お勤めの医療施設について教えてください



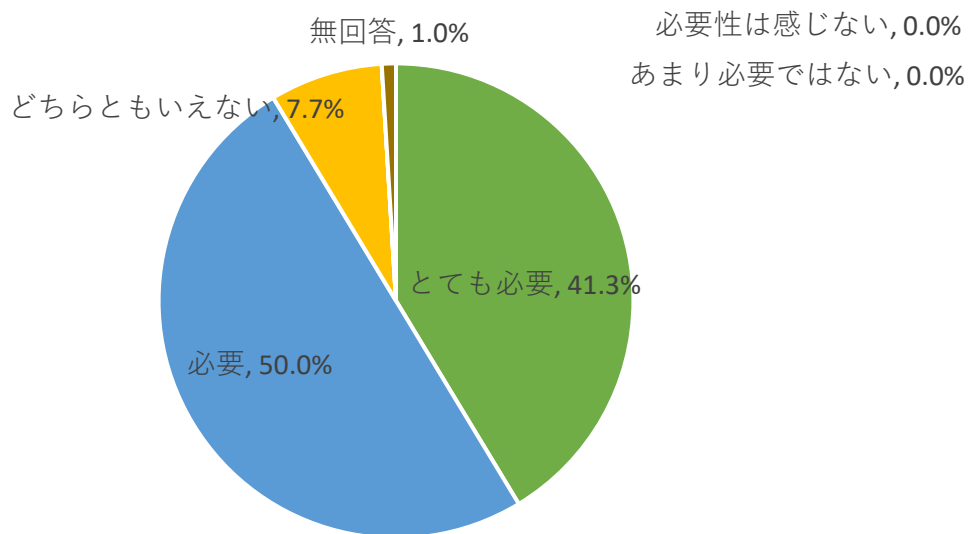
問2 お立場を教えてください



問3 業務上担われている内容で該当するものを教えてください ※複数回答可



問4 がんやがん治療に伴う性生活に関する支援は必要だと感じていますか



問5 問4で回答した理由を教えてください

デリケートな話で関心・悩みがあっても年齢にかかわらず患者からは相談しにくい内容 (23件)
 性の問題は恥ずかしいからと、相談できずに悩んでいる (抱え込んでいる) 人が多い (14件)
 若年層のがん患者も増えているから (13件)
 情報提供が少なく、治療開始前に脱毛などと同じように情報提供する必要がある (13件)
 日常生活の一部として支援が必要 (6件)
 本人からは質問しずらく、医療者側から情報提供することが望ましいと思う (5件)
 相談を受けることがあるため (4件)
 医療者もこの問題について問うことに躊躇してしまう (3件)
 若年層の患者では今後妊娠を考えている人も多いが、治療優先され、詳しい性について情報得たり考えることなく治療を開始されることが多いから。 (2件)
 あまり相談される機会が今までなかった (2件)
 相談したいが相談しづらい、相談できる場所・人がわからないという相談を受ける (2件)
 治療前と同様に性生活が行えなくなる可能性が高く、パートナーとの関係性にも影響があることであるため (2件)
 医療者もどう対応すべきか困ったことがある。 (2件)

ニーズはあると感じている（2件）

長期サバイバーのがん患者さんも増えているため（2件）

婦人科癌は妊孕性にも関わることも多いため、退院時性生活についての相談も多いため。

大事な話ではあるが、化学療法室がセミオープンで、話をするきっかけがなかなかつかめない

あまり患者から聞かれないが、不安はあるため

患者やパートナーの価値観によるため、一概には言えない

予後、化学療法への不安などが強く、性生活どころではない

落ち着いた頃には、あまり面談をするタイミングがなく、改めて性のことについて話す機会を失う

話し方、伝え方が難しい、苦手意識

患者さんやその家族のQOL、価値、パートナーとの関係性に大きく関与するため。

晩期合併症で関わってくるため

小児がん分野で働いているため、病気を経験した方が思春期以降にこのような話をする必要があると思っています。年齢に応じて、一度ではなく繰り返し説明をすること、また本人が信頼している人からの説明が大事だと思います。

乳がん患者数が多い病院です。病棟Nsは若いスタッフが多く、病棟看護師よりリ्यूブゼリーを渡すことすらも難しいと言われたため、ケモ室のトイレに「女性の方へ」というBOXを作り、リ्यूブゼリーのおためしを置いてみたところ、月に2〜3個減る現状があります。少なくとも、話せずに悩んでいる患者さんがおられるのではないかと考えます。(誰がもちかえっているのかわからない状況にしているため。トイレは男女兼用で一つしかありません。)

癌告知が当たり前の世の中になってきているように、患者さんには治療に伴うセクシュアリティの変化についても知る権利があると思う。医療者として患者さんの変化(怒る、泣く、思考を止めるなど)を受け止める覚悟をもって情報発信していきたい。

触れずらいことだが必要と思う。支援時期が難しい。

特にAYA世代は恋愛や性交渉について関心が高い時期であり、病気によってその関心を否定することを選ぶ可能性がある。性生活に関する支援は自分らしさを作っていく過程のAYA世代にとってとても重要だと考える。

性生活を含めた、恋愛、結婚などライフイベントを医療者が聴く用意ができていることは、患者さんをひとりにしない、ひとりで悩ませないために必要なことだと思います。

その方の考え方によるが、治療が終了し落ち着いた後に必要性を感じる方が多いため。（不要な方には紹介しないが）

正確な情報を得にくい内容であること、医療者も正確な情報を持っていない上に距離を持ちたい内容である。QOLに大きく影響する問題であるにも関わらず、相談できずに苦悩する患者が多く潜在していると思われる。

小児期にがんと診断され、抗がん剤治療を行うため、性に対する知識がないため

現在、患者会を通じて婦人科がん患者さんの支援をしています。語ることができない問題であるからこそ、看護師が相談に乗ることや情報提供することの重要性を感じています。

コミュニケーション手段の一つ

若年の患者さんには必要だと思う。ただ、私の病院ではほぼ高齢者(60歳以上)のため、あまり必要性、重要性を感じていない。

患者さんのメンタルサポートにつながるため

もっともコアな部分でもっともかくしたい部分。だからこそ。

病気がきっかけで性生活の変化、影響を生じることがある

性生活は家族やその他の人との関係性やアイデンティティに大きくかわるものの、公に話すことがはばかれる風潮が根強く残っている。潜在的にも苦しんでいる患者が多い。しかし、疾患別、治療別の資料も少なくエビデンスもなくどこまでこたえられるか医療サイドも難しいと感じている。

不安に思っている方はいると思うが、そのような対応をしてくれる窓口は当院には無い。だが何らかの支援が必要だと思う。

性生活や排せつに関することは患者自身から言い出すにはかなり勇気がいる。(日常会話のようにとはいかない)わからないままだと不安だけが増強。心身に悪影響。

必要とは思いますが、あえて看護師から追加説明はしていません。

患者を支えるパートナーに理解してもらった方が良い

今まではタブーとされていた印象。病院側から他のパンフレットと一緒に渡しても良いのでは？と思う。(年齢は関係なし)

患者さん側から相談を持ち掛けてくることがほとんどなく、医療者側からの発信がほとんどないため化学療法に伴う副作用があり、他の症状に対するマネジメントと同じだと思うから。

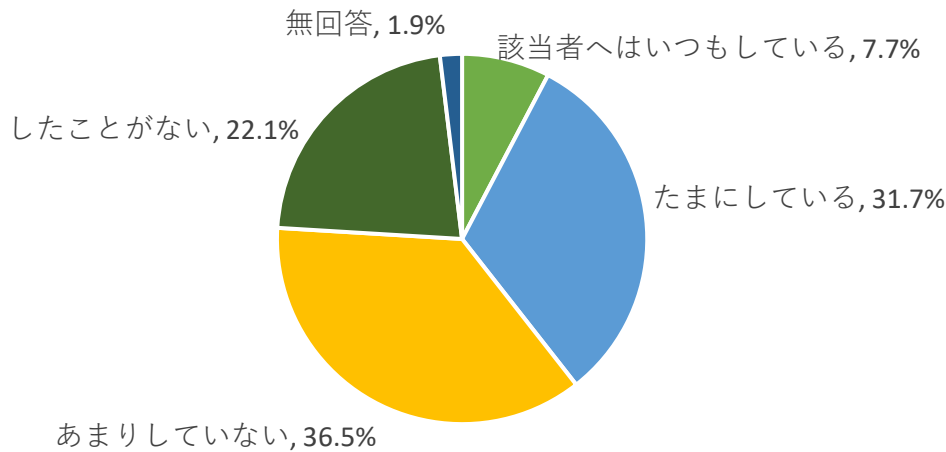
まず説明されていないことが多く、医療者も話を避ける傾向にあるため患者は知らないこと、わからないことが多いため支援が必要。

なかなか踏み込みにくい分野ではあるけれど、できることや必要なサポート、パートナーとの関係性や信頼etc話ができる場が日本にも必要だと感じているから。

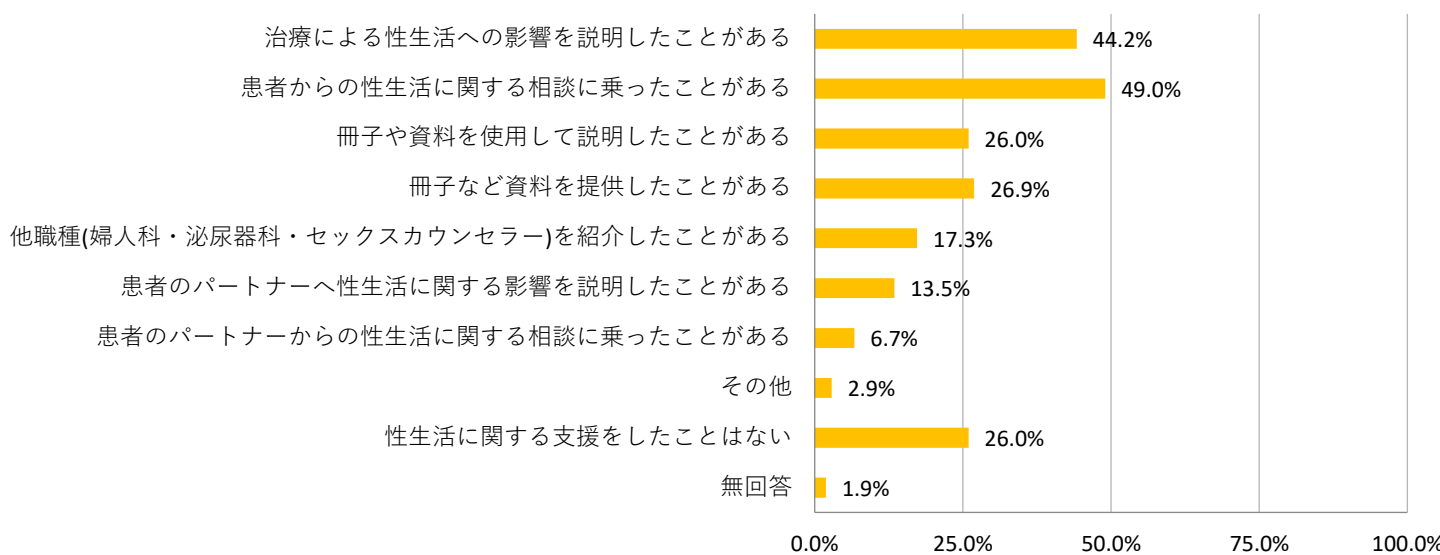
化学療法室で相談はなかなか無い状況、必要でもあるが、それに対応できる個別の部屋が無いため、積極的に問いもできないため。

年齢幅が広く、もともとの夫婦生活についての確認にとまどう

問6 がんやがん治療に伴う性生活への影響について支援をした事がありますか

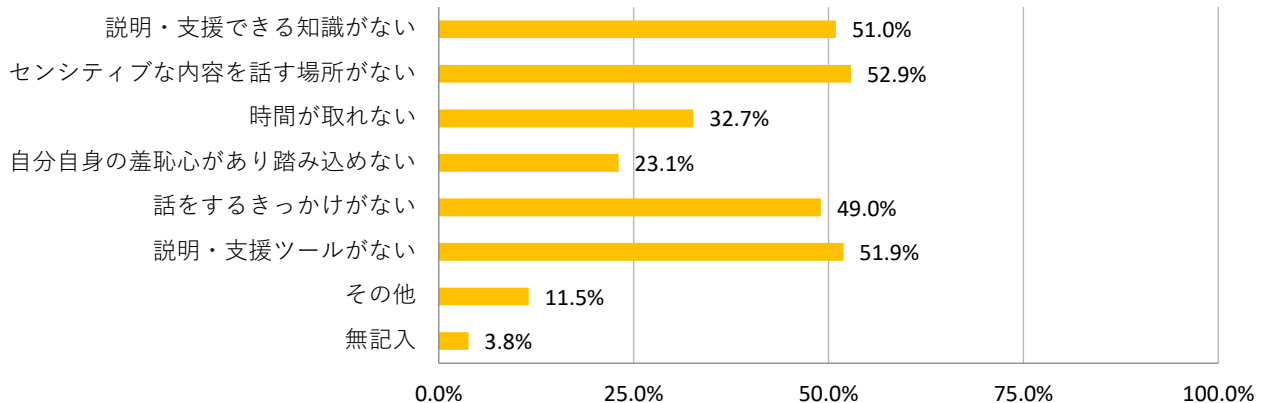


問7 がん患者やそのパートナーに対して行ったことがある性生活に関する支援について教えてください ※複数回答可



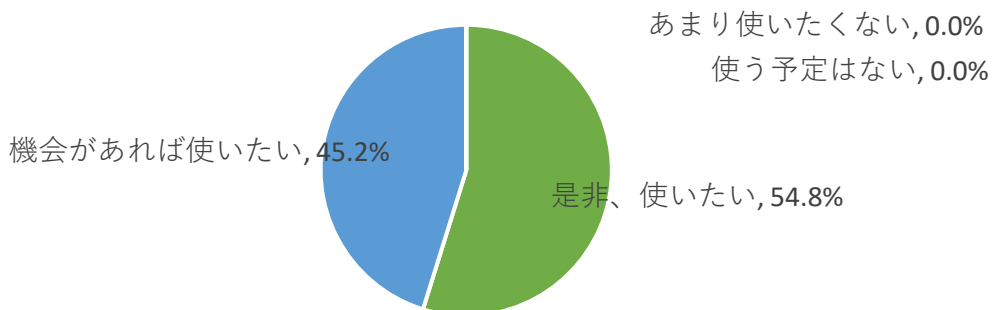
その他詳細：相談を受けたスタッフへの助言、情報提供、試供品のゼリー紹介、健全な性行動、性感染症に関することおよびその予防に関して指導したことがある。不妊（卵巣機能不全、無精子症）の際の相談にのることが多い。

問 8 がん患者やそのパートナーに対して性生活への支援を困難にしている理由があれば教えてください ※複数回答可



その他詳細：潤滑剤を使用するタイミングなど具体的な質問を受けてもわからない。また地域に紹介できる患者会がない。これまで必要に応じてCNJのサイトを案内していました。パートナーが来院しない場合、患者さんにしか介入できない。一方通行で、患者さんの負担が大きいのではないかと感じることもある。性生活への話は、外来支援が主になり、場所の確保が困難。また、外来受診が患者本人だけのことが多く、パートナーへ情報を届けることが難しい。困っているのに患者さんはどこに相談したらいいかわからない。患者さんは性生活にあまり関心がないだろう（優先すべきことがほかにある）。支援ツールが少ない。必要があれば、患者相談に応じている。

問 9 がん患者やパートナーへの性生活を支援する小冊子があったら、活用したいと思いますか



問10 問 9 で回答した理由をお聞かせください

話すきっかけのツールにしたい (24件)
 知識の習得や説明内容の統一により、よりよい対応ができると思う (10件)
 患者さんの目に留まる場所においておくだけでも何かの支援になれば良いと思います (9件)
 話してもいいんだというメッセージになる (8件)
 羞恥心が障害の一つになっているので「興味があれば読んでみて」と渡すだけであれば可能と感じる (4件)
 話す時間がなかったり話す雰囲気でもなく、後で患者自身が情報を得ることができる (3件)
 活用する支援ツールが身近になかった (3件)
 ツールが無いことも説明ができていない要因ではあるため (3件)
 小冊子を手に取りやすくするためのタイミング、場所を検討したい (2件)
 資料がある方が説明しやすく、受け手側も理解しやすいと思う (2件)
 冊子があれば、まずは患者自身が医療スタッフに聞かずに知ることができる (2件)
 聞きたくても聞けないことが書いてある。体験談があるのが良い。(いろいろな疾患の方のご意見があるのが良い) (2件)
 知識と体験談が記載されており説明しやすかった (2件)
 パートナーにも患者自身のことを説明しやすいし、パートナーにとっても、患者のことを理解しやすい。何度も読み返すことができる
 医療スタッフも、支援の必要性に気づける
 患者も聴きにくいことだから

妊孕性温存の説明の際に避妊の必要性についてお伝えすることがあるが、それ以上踏み込んで話す時間がないため、お渡ししてパートナー間で共有して欲しいと思います

言葉よりも羞恥心がなく、スッパリ話せそう

性生活への話は、外来支援が主になる。外来受診が患者本人だけのことが多く、本人には直接相談で情報提供をする機会が多い。パートナーへ情報を届けることが難しい。パートナーにむけた資材があれば、それをきっかけに医療機関等に相談できる可能性があると考え

AYA世代の支援のソースを準備したい

説得力が出る

図書よりも冊子の方が活用しやすい

患者さんが自由に情報を得られる環境は作っておきたい

全て言葉で伝えることは時間的に厳しい。パートナーは来院される事が少ないため、小冊子を自宅に持ち帰ってパートナーにも読んでもらいたい。本人がパートナーに上手く伝えられない人もいるため、冊子があれば、来院しないパートナーに冊子を渡して読んでもらい、がんサバイバーの性生活について理解を得られる可能性がある

患者さんご本人だけでなくパートナーにも理解をしていただきたいが、パートナーと一緒に来院する機会は極めて少ないため、冊子を読んでもらうことでパートナーの理解を得たいと思いました

実際に相談を受けた際に難しさを感じたため

小冊子による情報提供の方が、患者さん自身がしっかり読めると思うため

冊子を読んでくださいなら伝えやすい

医療者からの発信ツールとして、配置しておきたい。この種の冊子は、まだ他のメーカーなどの種類が少ない。内容も読んだ。良かった

内容が十分だと思える冊子がないため

ニーズはあると思うので

AYA世代が少ないから

AYAサポートチームとしてみんなと情報共有したい

今、使用している資材より若年者向けの資料という認識。使い分けをしたい

活用できるように患者さんと性について話すことに慣れることが必要と思う

口頭では言いにくい、網羅できない(相談する側、相談に乗る側、両者とも)内容が盛り込まれているので助かります。

小冊子を渡すところからでも始めたい。患者さん、ご家族が一人で悩まないようにサポートしたいので。

様々な説明を受け病気や治療のことで頭がいっぱいの中、患者さんやご家族からあえて相談をお受けしない状況で性生活について話題を出しづらい時など、このようなツールがあるとふと余裕が出たときなどに読んでいただけると感じます。医療者としても話題が出しやすくなると思われます。

直接話すより、視覚的に情報が得られるため、患者の安心材料になると感じる。話しにくい内容が具体的に患者の言葉として書かれているので理解しやすく、同感できることが多いと感じるため使用しやすいと感じたため。

最近若年層の抗がん剤治療も増えているため。

患者の年齢層が高く、あまり性にまつわる相談を受けることが無いが、相談を受けた際には説明や支援ができるよう努めたい。

口頭でお互い話しにくい内容であるため情報誌である方がいろいろな面での情報が得られると思うから冊子を活用したり渡すことが出来る。(自宅で見てもらったり)男性主治医であれば相談しにくい。乳がんの患者、若い層が多い。※恥ずかしくて聞いたりすることが出来ない可能性があるため

Pt自身でアクセスできる手段を作りたい。

当院でどのくらいのニーズがあるか不明のため

若年の患者さんの治療があるときは使ってみたい

婦人科や泌尿器科だけではなく情報が欲しい人はいると思う。活用していきたい。

個室を確保して説明が出来ない。患者から聞きづらいと思う。参考、話すきっかけとしたい。スタッフの意見も聞いて計画したい。

患者にとっても相談しにくい内容であり、化学療法室で他の悩み、不安、症状を訴える様にはいけないのではと思います。この冊子をロビーにおいて、必要な方が手に取り参考にしてみよう、あるいはそれをきっかけに相談してくる機会になると良いと思った。

健診が広まり、早期治療を受けるなど、抗がん剤の治療も増え、支援する機会も出てくるかもしれない。具体的な内容が載っている冊子が少ないため利用したいが、地域的には多くない考えるため、追加では不要と考えます。

患者さんから相談されないと、医療者からなかなかききにくい話です。場所も外来化学療法室なので、お隣にも聞こえてしまいます。外来化学療法室の入り口に患者さん向けのパンフレットを設置しています。リ्यूベゼリーが減ることからも、誰にも言えずに悩んでいる患者さんがおられるかもしれません。そのため、少しでも患者さんの救いになるのではないかと思います、パンフレットを設置してみたいです。

問11 ご意見・ご要望があれば自由にご回答ください

自分ががん経験者であり性に関することで相談出来なかったし、情報がなかった。冊子が必要とする患者さんに届くことを願います。

日本におけるセクシャリティーの問題は、文化的に非常に難しいと感じる。一方で医療者の中では少しずつ浸透してきていることを感じるため、CNJの活動に敬意を表します。がん医療に欠かせない問題と捉えられるよう皆で意識を変えていきたいと感じます。

今まで話題にしていなかったことですが、大切な内容だと思うので、いろいろ考えさせられました。当院での状況を把握したいと思います。情報ありがとうございます。

妊孕性について、少しづつ説明する機会が増えた。性生活について、指導が必要であるとあまり理解できていなかった。今回のアンケートで、改めて必要性に気がついた

医療機関ではなく個人開業の心理士です。近所の精神科・心療内科の先生から患者さんを紹介されたり、こちらからクライアントさんを紹介することもあります。医療機関への受診を促すこともあります。

医療的な情報は正確に伝える必要があるが、個人の生活に関する部分は患者さんが考えて選択できることが重要だと感じる。すべてを詳細に説明するのはなく、そのひとつにとって大事な部分を一緒に考えられる支援者でありたい。

患者、パートナーは、「こんなこと相談してはいけないもの」と思っている。医療者だけでなく、組織的に大々的に「相談していいんです」と明示できるようなポスターなどがあればいいと思う。気になっている人はインターネットなどをつかい、情報をとりにいくが、とりにいけない悩んでいる人はたくさんいる。その方々をすくえるような支援ができればいいよと思う。

素晴らしい取り組みであり、嬉しく思っております。あたりまえに性生活に関する支援ができるようになることを願っています。

先日行われた乳がん学会で渡邊知映先生の講演を聴かせていただき、質問もさせていただきました。今後先生からいただいたアドバイスを基に自施設でも性の問題に取り組んでいきたいと思ひます。

現在、若いがんPt(AYA世代)がほとんどいないため、活用する機会が少ない。しかし少ないからこそ、資材があった方が良く思ひます。

医療者用のガイドラインもできるいいなと感じました(資料など)。製品のサンプルなども気軽に渡せるようになるといいなと思ひます。ただつてがなく・・・。難しいのですが。

外来化学療法センターの空間がオープンな作りになっていて、きっとニーズはあると思ひますが、患者さんから性生活について相談を受けたことはありません。治療の場以外でも相談できる場がもっとあるといいのと思ひます。

セクシャリティーの問題はなかなか踏み込みにくいところがあります。乳がん術後の下着問題も同じだと思ひました。治療が始まり、ふっと落ち着いた時に「そういえば・・・」と思ひ問題なんだろう・・・と思ひます。ご紹介いただけてとてもありがたいです。

当院は性生活についてはA4の用紙を1枚置いてあるだけですが、たまーに減っているのて、読んでいる人は読んでいるのかも、と思ひます。

必要な情報を確実に有効的に伝える必要がある。多職種でそれを誰が説明するのか？チーム医療の在り方について、検討しなければならないと感じています。情報助かります。ありがとうございます。

ぜひ活用させて頂けたらと思ひます。がん相談支援においても、各診察室などでも活用していけるのではないのでしょうか。

自施設の化学療法を受ける患者さん向けのパンフレットは作成しているが、注意事項のみにとどまっているため、今回のようなパンフレットは有難いと感じています。

冊子の中に補助具などの紹介がありますが、使用方法など、他部署との連携が必要となるため、具体策を。治療室で相談は難しいのが現状です。

デリケートな問題なので、相談しづらいと思ひます。若い方だけではなく、男性も悩んでいる患者さんもいると思ひますが、声かけづらいし、どのように対応していいかもわからない。体験談があり(冊子に)、共感できるところもあり良いと思ひます。

ゼリーのサンプルがあれば活用したいです。

がん化学療法看護認定看護師として13年目になります(化学療法室勤務は16年)。性機能障害に対する患者、家族からの相談は重要なことと考へ、今回のような冊子で手に入ったものや、リ्यूブゼリーのサンプルを置いたりしていました。しかし、毎日行っている患者指導では性機能障害のことまで伝えることは難しく(他にたくさん伝えることがあるため)、相談がまれにある場合のみ個別対応を行ったことがある程度でした。介入の機会を現状で積極的に作ることはやはりなかなか難しいですが、やはり冊子が手に取れるようにロビーに掲示しておいたり、何か相談できるようなきっかけを考へることが必要と思ひました。

オリエンテーションの際など、年齢を決めて、治療のパンフレットと同時に渡せる資材として活用できるかと思ひます。個別で渡せる場合やみんなが手に取れるような場所にある場合、「性」と書かれていると手に取りにくい(人前で)ので、表紙に工夫できると良いかと思ひました。

情報提供が必要と感じてはいましたが、なかなかできずにいました。このような冊子があると助かります。年齢問わず悩める問題だと思ひます。パンフレットを読ませていただき、アドバイスだけでなく実際辛い思いをした体験までも記載されていて、患者さんのナマの声が聞ける冊子だと感じました。やはり、いい事ばかりではないでしょうし、包み隠さず話してもらえるのは患者さんにとっても大きなメリットがあると思ひます。ご紹介くださりありがとうございます。

アンケート結果から...

がんやがん治療に伴う性生活に関する支援は必要！

これまでに回答を得られた104件のうち**91.3%**の医療従事者ががんやがん治療に伴う性生活・セクシュアリティ支援は必要だと回答

《主な理由》

- ・ デリケートな話で関心・悩みがあっても年齢にかかわらず患者からは相談しにくい内容だから
- ・ 長期サバイバーの患者さん、若年のがん患者さんが増えてきているから
- ・ 性のことも日常生活の一部、当たり前のように情報提供がされるべき
- ・ 患者やパートナーからは相談しにくく、医療従事者から支援するべき

がんと性(セクシュアリティ)の支援の実施はわずか7.7%

がんやがん治療に伴う性生活への影響について該当者へはいつも支援していると回答したのはわずか7.7%！

《支援を困難にしている主な理由》

- ・ センシティブな内容を話す場所がない
- ・ 説明・支援ツールがない
- ・ 説明・支援できる知識がない
- ・ 話をするきっかけがない

小冊子「もっと知ってほしいがんと性にまつわること」



Contents	
がんの患者の性の悩みはさまざま	3
がん治療の性生活への影響は？ ～女性編～	4
がん治療の性生活への影響は？ ～男性編～	6
治療中の性生活の注意点は？	10
性生活の再開時期は？	11
パートナーと良い関係を築くには	12
治療中・治療後の恋愛と結婚	14
病気になっても性生活やスキンシップは大切	15



詳細・申込など

- ・ 性生活やパートナーとの関係性に不安や心配事のあるがん患者・パートナーのための情報をまとめています。
- ・ 医療機関へアンケート・無償提供(40冊)実施中。(2023年3月まで)

アンケート実施とともに送料無料で無償配布している小冊子「もっと知ってほしいがんと性にまつわること」は幅広い知識だけでなく体験談も多く掲載しており、医療現場での患者・パートナーへの支援にお役立ていただいております。

アンケートへのご協力ありがとうございました